
苺の収穫

豊田 日吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葎の収獲

【Nコード】

N8144F

【作者名】

豊田 日吉

【あらすじ】

妹を愛するあまり狂気に取り付かれる兄の捕食的物語

一羽（前書き）

残酷な描写があります。現実と想像の区別がつかない人は観覧をやめろやめてやめようやめたやめるやめる？

一羽

「おかえり」あたりまえな極平凡で、みじかな人物への労いの気持ちを表した言葉。それを投げ掛けてくれた人物その人こそが僕の愛した人。

「おかえりお兄ちゃん」僕の正面に立つて、見上げなら微笑んでる小さなイチゴの様な女の子

「食べたら美味しそうだ……」

「うん？何言ってるのお兄ちゃん」

「えっ… な、なんでも無いよ（やべっ… 想像してたら口にでちゃった… オマケに唾液が分泌されてる…）」慌てて口の中で大海と化していた、大量の唾液を喉の奥底へ押し流した妹に変に思われなかつただろうか？ なにも言えないまま僕はただその場で、棒の様に立って居ることしか出来なかった。「あつ、そっかお兄ちゃんお腹空いてるんだね！」

[illegible]

僕の手を何かが、触れた。その何かは、暖かく、手だけでなく、身体全体が包まれているような、包容力に満ち溢れていた。気付いたら、僕の心は、平安を取り戻していた。手はやや下の方に位置していた。見下ろすと、僕の手腕と小さく壊れそうな、愛らしい母の手

腕とが、連結されていた。

「お兄ちゃんどうしたの？早く一緒にご飯食べようよ」えっ……
…こんなに汚れて毒された僕の手に触れちゃ駄目だよめろ止めてくれ止めて辞める病めてやめろや、やめろおお！！！！！！

ドンッ！！！！

一羽（後書き）

見てくださった方々ありがとうございます。見てくれない方々も来て下さってありがとうございます。

小説を書くのは、初めてでかなり酷くなってしまったかも知れませんが、よかったらアドバイスをほしいです。ありがとうございました。

二匹（前書き）

第2話です。帰ったら帰ります帰って帰り帰ってくる帰れ帰る帰る？

二匹

「おかえり」あたりまえな極平凡で、みじかな人物への労いの気持ちを表した言葉。それを投げ掛けたその人こそが、私の愛した人物。

「食べたなら美味しそうだな……」私を見て不可解な言葉をこぼれるような声で、したたるように言った。私の愛しい人。

「うん？何言ってるのお兄ちゃん？」

「えっ……な、なんでも無いよ！」お兄ちゃんはかつこいい、優しい、人気者で頭もいい。私には、もったいない位のお兄ちゃん。今日も私の気持ちも知らないで、普通の生活を謳歌する私の自慢のお兄ちゃん。

でもやっぱり、今日のお兄ちゃんは何処か変だった。だってそうだよ、私を見て美味しそ……

……お兄ちゃん

……ん……………が……………

……私だけを見……………

……お兄ちゃん……………

……………てる。

歡喜。それが結論だった。

私を見ながら、美味しそうだなんて……お兄ちゃんを愛する私からすれば、私にくれた最高のプレゼント。贈り物。嬉しい。私だけに家族の愛以外の何か別の感情を抱いてくれた。私だけに注がれるお兄ちゃんの視線 声 言葉 感情。私は心から嬉しかった。嬉し過ぎる。他の誰でも無い、私だけに注がれるお兄ちゃんの全て。

私は感情をさらけだしたい……そんな欲望に取り付かれた。お兄ちゃん

んに抱きつきたい 体温を感じたい 胸の鼓動を感じたい。だが、それを実行に移せば、間違いなく不審に思われてしまう……

「あつ、そつかお兄ちゃんお腹空いてるんだね！」とりあえず、当たり前障りの無い言葉でお兄ちゃんの出方を見してみる。

「そ、そうなんだよ！は、恥ずかしいな」やっぱり何処がおかしいお兄ちゃん。でも、そういう所も愛らしいよおおおうお兄ちゃん

気付いたら私はお兄ちゃんの手を握っていた……考えるよりも先に行動していた。酷く動揺したが、それもすぐに落ち着いた。原因はお兄ちゃんの手。それは暖かく、手だけでなく、お兄ちゃんの体全身を包んでいるような感覚だった。

[illegible]

私は失禁しそうなほど、悦んだ。もういつその事此処で、押し倒してお兄ちゃんを感じてしまいたくなつたが、まだその時ではないと思ひ止まつた。だけど……もう少しだけ……手を握つていていいよね？私は心の中でお兄ちゃんに問いかけた。返事は勿論無い。

「お兄ちゃんどうしたの？早く一緒にご飯食べようよお？」少しでも長くお兄ちゃんの手を握っていたい一心で、お兄ちゃんに投げ掛けた時間稼ぎの言葉。

二匹（後書き）

また来て下さってんですねありがとうございます。

初めての方々も来て下さってありがとうございます。感想やアイデアや要望や質問や相談なんでも送って下さいませ。ませ。よいお年を

3 センチ（前書き）

こんにちは皆さん沢山の御アクセスありがとうございます。アクセスしていない人も来てみて下さい。新年あけましておめでとうございます。聞こえない聞こえました聞こえたら聞こえたね聞こえる聞こえる？

3 センチ

「お、お兄ちゃん？ご、ごめんね？いきなり手を握られてびっくりし、しちゃったんだよね……？」 苺は僕に何かを語りかけているそれは確かだ微かに聞こえるでも、僕は何も言わない いや、何も言えない……だって……僕は……苺に……

ドンッ！！！！！

僕は苺を突き飛ばした

「えっ………？」

「いきなり何すんだよ！！ふざけんなよ！お前！！！何考えてんだよ！！！」

「………」 相当怖かったのか、何も言えずに、苺はただ床に仰向けになったまま動かなかった。顔は青ざめていて、恐怖というより絶望を絵に書いた様な表情をしていた。恐怖？からか体は小刻に震えていたが光を失った瞳は、震えながらも視線を僕からそらす事なく、ただじつと僕を見つめていた。

僕はその姿を見て衝動（欲望）に駆られた。……いまなら………食える………苺を………この状況なら今の………いつもの光を失った………今の………苺なら………僕から………汚れた僕の手でも………触れられる………食える………

僕は静かに床の上で倒れている苺の上に股がった。

そして、力の抜けたというよりも魂の抜けた苺の後頭部に手を回し、苺の恐怖？で固まった顔を僕の目の前に持ってきた。

「さて……どこから逝こうか……」 苺の小さく愛らしい顔のありとあらゆる部分を余すことなく左手で、品定するように丁寧に慎重に壊さない様に触り尽した。堪能したのだ。

苺の髪は何かの繊維の様に細く、羽の様に軽く滑らかであり、典型的な少し長めの黒髪だ。あまりにもいい香りがしたので、思わず顔を苺の頭にくつつけてしまった。

次に耳 上に掛った髪をどかし発掘された。形は美しくこれもまた非常に柔らかいのだ食べる際は、削いだ後に焼いて頂きたいところだ。次は鼻 ツヤツヤとした肌ざわりで先端をいくら触っても飽きる事はなかった。

次は唇 これもまた削いで食べたら食感が、最高だろうな。触れば触るほど味や香り食感に対する興味や好奇心が僕の中で大量生産されてく。

最後に目 黒真珠の様な怪しげな光を放っていた。僕は苺の瞳をじっと見つめたそこに映っていたのは、悪魔の様な笑みで、発情して狂った犬の目様な目を持つおぞましい自分だった。

「うわあああああ……！！！！」僕は正気を取り戻した。僕は苺の顔の自由を支配していた左手をすぐに離れた。その次に右腕を風よりも速くひっ込めた。僕はすぐに苺から離れた。

「ぼ、僕は………」

「お兄ちゃん………」 苺の声を聞くと血の気がさつと引いた。

僕は苺から逃げるように、自室に駆け込み鍵を閉めた………

一時間後

「お、お兄ちゃん？ご、ごめんね？いきなり手を握られてびっくりし、しちゃったんだよね？」

ノックの音だ。母が来たのだろう。僕はベットにもぐり込み全力で耳を防いだ。

「お、お兄ちゃん怒ってるの？」

何も聞こえない

「ごめんなさい！！！！もうしません！！！！だからでてきてよお！！！！」

何も聞こえない

「さっきの続きしてよお！！！！さみしいよおお！！！！お兄ちゃんああん！！！！」ドンツドンツ

ドアを叩く音しか、聞こえない

「お兄ちゃんごめんなさいもうしませんごめんなさいごめんなさい許して下さいごめんなさいお兄ちゃんごめんなさいもうしませんごめんなさい許して下さいごめんなさいお兄ちゃんごめんなさいごめんなさい」

何も聞こえない

3 センチ（後書き）

今回も見てくださってありがとうございます。見てない方々も来て下さってありがとうございます。そろそろ兄の名前を考えねばなりません。フルーツにするか迷っています。エロシーンも入れたいです。皆さんはエロシーン好きですか？

私は好きです。大好きです。私のために時間を割いて頂けるのなら、感想や要望や質問や相談何でも送ってやって下さい。あけましておめでとうございました

4 階（前書き）

こなにちわみなさん。お元気ですか？福袋たくさん買いました。みなさんはどうですか？忙しかったので中々書く時間が無く、ちょっと遅くなってしまいました。すいません。

謝って謝り謝れ謝った謝れない謝らない謝る謝る？

4 階

ドンッ！！！！！！

「えっ……………」

頭が真っ白になった

何故 私が床に横たわっているのか。

何故 お兄ちゃんが怒っているのか。

何故 さっきまで繋がっていた手が繋がっていないのか。
何も分からなかった。

「いきなり何してるんだよ！！ふざけんなよ！！お前！！何考え
てんだよ！！！」

「……………」

お兄ちゃんが怒ってる…………でも…………なんで…………どうして…………

私は、今の状況を理解する事に頭がいっぱいだった。
でも、に何があつたのか理解した。

私はお兄ちゃんに突き飛ばされた

信じられない信じたくない理解したくない何かの間違いだ。もう一
度、頭の中で整理しなおした。私はこの状況に適した言葉を算出し
た。

私、痛い、倒れる、寂しい、辛い、切ない、冷たい、お兄ちゃん、
怒り、罵倒、拒絶

お兄ちゃんに……嫌われちゃった……のかな……？
嫌だ。絶対に嫌だ。認めたくない。

えっ……お兄ちゃん何してるの？

お兄ちゃんは私の上に馬の様に股がってきた。そして、私の後頭部に手を回し、私の顔を覗き込む。その瞳には、なにが起こっているのか理解出来ず、唯ひたすら弱々しく震えていることしか出来ない惨めな顔をした私がいた。

「さて……どこから逝こうか……」

私を見つめながら楽しそうに言った。次の瞬間お兄ちゃんの左手は私の頬に向かっていた。お兄ちゃんの顔はまるで、血に飢えた狼の様に狂暴で狂喜に満ちていた。だけど、お兄ちゃんの左手は、私を世界で一番大切な宝物の様に丁寧に慎重に壊さない様に愛撫してくれた。堪能してくれた。

お兄ちゃん左手は太陽の様に暖かく、さつき繋いだ時と、何も変わらない優しいお兄ちゃんの手

次は 声 聞き心地の良い少し低めのテノールいつも私を安心を与えてくれる大好きな声

次に 匂い お兄ちゃんには言えないけど、お兄ちゃんが外出している時はいつもお兄ちゃんのベットで……

最後に目 いつものお兄ちゃんの目は美しい光を蓄えいつも私に光を与えて癒してくれる。でも、今は月の光を受けたナイフの様に鋭く妖しく光輝いている。もうすぐこの光は私を貫いて私を犯し尽されてしまう。

嬉しい お兄ちゃんが

私をお兄ちゃん染めてもらえる

徐々にお兄ちゃんの顔が私に近付く

もうすぐ……もう少し……我慢出来ないよお……

もう耐えられない。私はお兄ちゃんの唇を私から、求めた。

「うわあああああ……！！！！」

お兄ちゃんは絶叫した。

気が付いたら、私の体は既に自由を取り戻していた。

「ぼ、僕は……」

「お兄ちゃん……」お兄ちゃんは私を見ると顔を青くして、自分の部屋に逃げるよう入っていった

玄關に一人になった私は呆然とした。

「何で……もう少しだったよね……お兄ちゃん……？何でやめるの？……わからないよお……また怒らせちゃったのかな？……私が思い通りに動かなかったから……？……さっき手を勝手に握ったのを思い出して嫌になっちゃったのかな……？私嫌われてないよね……？謝りに行けば、大丈夫だよね……？」

一時間後

コンコン

「お、お兄ちゃん？ご、ごめんね？いきなり手を握られてびっくりし、しちゃったんだよね？」私を嫌いになったんじゃないよね？

「……………」

「お、お兄ちゃん怒ってるの？」大丈夫お兄ちゃんは怒ってなんかいない絶対…

「……………」

「ごめんなさい！！！！もうしません！！！！だから出てきてよお！！！！」ちゃんと謝ればきつとわかってもらえる……

「……………」

なんで何にも言ってくれないの？わからないよお…

お兄ちゃああん！！！！

「さっきの続きしてよお！！！！さみしいよおお！！！！お兄ちゃああん！！！！」ドンツドンツ私こんなに好きなんだよ？私こんなに愛してるんだよ？私こんなに一緒にいたいんだよ？なんでわかってくれないの？ねえどうして？どうして？？？「お兄ちゃんごめんなさいもうしませんごめんなさいごめんなさいごめんなさい許して下さいごめんなさいもうしませんごめんなさいお兄ちゃんごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

次の朝まで、ひたすらドアの前で謝り続けた。

「……………」

4 階（後書き）

こなにちわ。遅くなつてしまい申し訳ありません。待つてくれた方々ありがとうございます。そうでない方々も来て下さつてありがとうございます。

感想や質問や相談やちょっと怖いけど、不満や気に入らない点などもガンガン送つてやって下さい。遅くなつてしまい申し訳ありませんでした。

後輩（前書き）

言わば外伝です。このキャラ結構好きです。照れました照れたい照れるかも照れない照れた照れる照れる？

後輩

苺 「あつ…雨だよ。お兄ちゃん」

「そっだよね」

苺 「でも、傘ないよ」

「そっだよね」

苺 「そっだよねって…ちょっとはどうするか考えてよお」

「そっだよね…アハハ…」

苺 「どうしたの？いきなり笑いだしたりして？」

「いや、何だか嬉しくってさあ…」

苺 「私も何だか嬉しいよお兄ちゃん…えへへ／＼」

「ああ…でも、どうすっかな…傘無いしな…コンビニ寄って傘買うか？」

苺 「うん！」

「なんだよ傘一つしか売ってないのかよ」

苺 「そっみたいだね」

「うーんじゃあ、仕方ないから、苺は先に帰っていいよ」

苺 「えっ…だ、ダメだよ！ダメダメだよ！お兄ちゃん！そしたらお兄ちゃんどうするの？風邪引いちゃうよお！」

「大丈夫お兄ちゃん強いからさ」

苺 「ダメだよ！お兄ちゃん全然強くないもん！私がいないと餓死しちゃうもん！」

「アハハ…苺は本当に心配性だな」

苺 「じゃあ止むまで一緒に待つ！絶対に待つ！」

「それは駄目だよ。苺が風邪引いちゃうもんな」ナデナデ

苺 「うゝ子供扱いするなゝ！」

「じゃあ大人の苺に命ずる！速やかに家に退却せよ！」バツ

苺 「サゝイエツサゝ… ってちつがあう！」

「乗りツツコミも覚えたか流石は中学生！」ナデナデ

苺 「もう！！すぐそうやってはぐらかすんだから！」

「じゃあちゃんと言っうね。苺は帰りなさい。先に帰って美味しいご飯用意してくれな。」

苺 「お兄ちゃんは本当にそれでいいの？寂しくない？」

「僕は苺が風邪を引いて寝込んでんじやう方が悲しいかな僕はとうにかしてかえるかなね」

苺 「えっ… なんだか嬉しいかも／＼」

苺 「じゃあ… すぐにすぐに帰って来てね絶対だからね約束だからね！！」

「わかったわかった」

苺 「すぐにだよ！寄り道何かしちゃだめなんだからね！」

「努力するよん」

「じゃーな」ナデナデ

苺 「うん… バイバイ」

「さて、ああは言ったがどうすつかなゝ」

？ 「あれ？あれは… せんぱゝい」

「うん？ああ林檎じゃん何してるの？」

林檎 「先輩こそ何してるんすか？」

「見ての通り雨宿りだよ」

林檎 「せんぱゝいまさか天気予報聞いてないんすかあ？傘は持つ

ていくように言ってたっスよ？」

「見てたけど、妹を迎えに行った時に傘忘れちゃった」

林檎 「先輩はドジッ子スね」

「うるせえほっとけ」

林檎 「先輩このあとどうするんすか？」

「一応他のコンビ二に駆け込んで傘買つてかえるよ」

林檎 「このコンビ二傘売ってないんすか先輩に似てドジッコンビニッスね」

「僕とコンビ二はドジコンビだと… なんだか自分が恥ずかしくなつて来たよ…」 林檎 「あ… せ、先輩落ち込まないでほしいっす！ あっそうだ… よ、よかったら先輩自分の家にこないっすか？ 今日親いないし」

「嬉しいけど、遠慮しとくよ家に妹が飯作って待ってるから」

林檎 「そ、そうっスか… そうっスよね… ハハハ…」

「でもありがとな誘ってくれて。よかったら、また今度にもお邪魔させてくれるかな？」

林檎 「ももももちろんっスよ！先輩なら何時だって大歓迎ッスよ！！」

「アハハ… ありがとな」 ナデナデ

林檎 「はう…」 ビクッ

「あっ… ご、ごめんいつもの癖で…」

林檎 「い、いや大丈夫ッスよ／／」 カアア

「お、おい本当に大丈夫かお前顔真っ赤だぞ熱でもあんのか？」 ペ
タッ

林檎 「あわわわ…／／／（先輩が手を自分のおでこに…）…／／」

「おっ？雨止んできたな。よし、じゃあ僕は帰るよ気を付けて帰れよそれと帰ったらすぐに暖かくして寝ろよ」

林檎 「は、ハヒ…」 ドキドキ

「よし、じゃあな」

林檎

「……………帰っちゃった…………先輩ずるいつスよ…………自分だ
けこんなにドキドキして…………えへへ…………／／／…………先輩来てくれるって
…………自分嬉しいツスよ…………先輩／／／」

後輩（後書き）

久しぶりです。元気ですか？私は元気です福袋の中身は宝物でいっぱいでした。皆さんはどうですか？

質問や感想や要望や相談なんでも送りつけてやって下さい。

先輩（前書き）

林檎ちゃん可愛いな〜

私の中の林檎ちゃんの株価はかなり高いです。

いろいろ考えた結果やはりハッピーエンドは無理そうです。

まあ……私はハッピーエンドにする気なんてはなっから無いんですけどね。

気付いて気付いてた気付く気付かない気付いた気付く気付く？

先輩

好きッスよ…いつも見てたッスよ

勉強してるところが好きッスよ 何故かって？頭良さそうで、かっこいいからッスよ。

部活してるところが好きッスよ 何故かって？ 汗が光っていて、綺麗だからッスよ。

友人としゃべってるところが好きッスよ 何故かって？ 楽しそう
で輝いてるからッスよ。

ご飯を食べてるところが好きッスよ 何故かって？ 幸せそうな顔
をしてるからッスよ。

いつも見てッスよ
何故かって？

愛してるからッスよ。

自分にだけ元気を与えて貰いたいッスよ いつも

自分を幸せにしてほしいッスよ いつも

自分は満足してないッスよ いつも

自分だけを見てほしいッスよ いつも

自分の手を握ってほしいッスよ いつも

要するに自分だけのモノになってほしいッスよ いつも

自分がいじめられてた時に誰にも話せ無くて、独りぼっちで、校舎の裏で泣いていた自分に話し掛けてくれたッスよね

その後、同じスポーツの部活に誘ってくれたッスよね 男子と女子別々だったんスけどね…

でも、部活の休憩時間は昼食に誘う機会が増えたし、部活の後には一緒に帰ったり、一緒にゲーセンいたり、一緒にラーメン食べにいたりする大切なイベントの時間も増えたッスよ。だから…自分は部活きつかったけど、がんばったッスよ

夏は日射病でぶっ倒れるまで、外周で走りまくりッスよ

冬は手がかじかんでもシユート練習とパス練習はやり続けたッスよとにかく褒めて欲しかったッスよ

認めて欲しかったッスよ

分かって欲しかったッスよ

いい娘だって。

自分は変わったッスよ

性格も明るくなって、いじめられる所か今じゃクラスで一番の人気者ッスよ

長かった髪もバツサリ切って、ショートカットにしたら、みんな可愛いつて好評なんスよ？

秘密っスけど、男子から告られされちゃったッスよ

でも大丈夫っスよもう自分は決めてるっスから

嬉しいッスよ…自分をここまでつれてきてくれて自分をここまで導いてくれて ここまでがんばれたのは、先輩のお陰っスよ……

でも先輩は自分をただの後輩ぐらいにしか思ってないッス……………

悲しいっスよ…………切ないっスよ…………気付いてほしいっスよ…………
…………大好き…………だよ…………

先輩

先輩（後書き）

イヤー林檎ちゃん可愛くて仕方ないですこのままでは林檎ちゃん兄がくつついてしまいそうです。

質問や要望や感想や相談なんでも送りつけてやって下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8144f/>

苺の収穫

2010年10月28日07時51分発行